獅子と歌姫の結ばれるとき（全年齢版）

双子烏丸

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ガンダムＳＥＥＤ　ＤＥＳＴＩＮＹ本編とは少し異なる世界線で、アスランとミーアが結ばれて幸せになって行く、その一歩目の物語。

要するにアスミアＳＳ、タイトル通り今回は全年齢版……通常版はまた後日に。

本作はｐｉｘｉｖでも投稿しています

目次

第1話 …… 1

第1話

鏡に映る自分の姿――改めて不思議な気分だ。
（オーブの軍服を着ている感じと似てはいるけれど、でも少し違うな。この白いタキシード……似合っているだろうか？）
そう思いながら鏡を見ながら裾や襟首を調整する。もう何回も直してはいるけれど、それでも心配になってしまう。
（何しろ大切な日だ。俺と……彼女との）
だから身だしなみはしっかりしないとな。改めて服装のチェックをしていた、そんな時に。
「アスランのタキシード姿、よく似合っているよ」
目の前の鏡に映り込む俺の親友。オーブ軍准将の士官服をしっかり着込んで挨拶に来てくれた、キラ・ヤマトの姿。
そんな唯一無二の親友に顔を向けて、俺はにこやかに返事を返す。
「来てくれたのか、キラ。プラントからわざわざ俺達のために来てくれて、凄く嬉しい」
俺の今いるオーブは地球上にある島国だ。対してプラントは宇宙に浮かぶスペースコロニー、わざわざ地球にまで降りて会いに来てくれた事には感激だ。
「当然だよ。だって今日は君の晴れ舞台、結婚式なんだから。改めて結婚おめでとう、アスラン」
友からの祝福の言葉、俺は嬉しく思いながらもう一度、鏡に映った自分の姿を見直す。タキシードを着こんだ俺の姿。――うん、ばっちりだ。
俺は席を立ってキラに、自信を持って言った。
「さて、じゃあ行こう。俺の大切な――花嫁が待っている」
俺とキラは花嫁のいる更衣室に移動した。すると……出迎えてくれたのは。
「キラ、それにアスランも。よく来てくれました」

「二人とも良いタイミングだったな。丁度、こっちも準備はバッチリだ」
プラントの歌姫であるラクス・クラインと、それにオーブの元首であるカガリ・ユラ・アスハ。部屋に入るとすぐ二人が俺達を迎えた。
「やっぱりラクスとも一緒に来たんだな」
俺の言葉に隣にいるキラははにかむ。
「もちろんだよ、彼女も結婚式に来たがっていたから」
「ふふふっ。キラと同じで、私もアスラン達を祝福したいですから。
――ご結婚、おめでとうございます」
ラクスからも祝福の言葉を受けて、俺は彼女に礼を伝える。それから――。
「……カガリも」
「当然だろ？　ようやくアスランが結婚するんだ、私にも祝わせてくれよ」
俺に明るく笑ってくれるカガリ。俺も笑い返そうとするが……それでも、罪悪感で少し顔を俯けてしまい。
「すまない。カガリ、俺は――」
彼女も祝ってくれているのはもちろん嬉しい。けれど同時に、強く申し訳なく思って。
けれど、カガリはそんな俺の右肩にポンと手を置いて、逆に励ますように言ってくれた。
「気にするな、私にはそれよりもオーブを導いて行く事が大切だ。……父上から受け継いだ大切な使命なのだから。それに、メイリンとも二人で話して納得もしている。
私たちは大丈夫さ。そして、あの子にはお前が必要だ。アスランにとってもきっと同じだと思う。互いに心の支えになれるはずだから」
「俺が彼女にとって、か」
「ああ！　だからお幸せにな。お前も、ちゃんと彼女を幸せにしてあげなよな？」
俺自身、今回の結婚に踏み切るまでに色々思い悩み、葛藤もした。それでも……俺は。

「俺はもう迷わない。必ず、二人で幸せになってみせる」
俺の言葉にカガリも満足したような、表情で応えてくれた。
「よしっ！　そうこなくっちゃな。
……それにさ、花嫁の方も準備は終わっているんだ。会いに来たんだろ？　だったら――ほらっ！」
「おっと……と」
カガリは俺の横後ろに行くと、そのまま背を押して部屋の中に押す。
すると目の前に、いたのは。
「来てくれたのね、アスラン！　その白いタキシード……とても恰好良いですよ」
純白のドレスを身に纏って屈託のない表情を向ける、俺の大切な花嫁。
ウェディングドレスの白と鮮やかな桃色の髪と、星を象った前髪の髪飾りがよく映えて。それに、ラクスと似た顔をしてはいても彼女だけが持っている、にこやかで天真爛漫な笑顔を向けて、俺に。
「ふふっ、そう言ってくれて嬉しい。
……それによく似合っている、白いウエディングドレスを着た君も。凄く綺麗で、それに可愛い、俺だけの花嫁だ――――ミーアは」
俺が返した言葉。それに照れたように、だけど心から幸せに満ちた笑顔で応えてくれたんだ。
「はい！　ようやく私も、アスランのお嫁さんになれますから。嬉しくて……胸が一杯です！」
ああ。ようやくこの時が、来たのだから。俺は彼女にそっと手を差し伸べる。
「一緒に行こう。今日は幸せで一杯の、最高の結婚式にしたい」
俺の花嫁……ミーア・キャンベルは喜びに溢れた表情で、俺の手を優しくとって頷いてくれた。

――――

オーブにある教会で挙げた結婚式。花嫁姿のミーアと二人で、赤いカーペットの上を、ウェディングロードを歩いて行く。
……決して大きい教会、式場と言うわけではない。結婚式そのものも知り合いに限った小さい物だけれど、それでも多くの人が集まってくれた。親友のキラやラクス達ももちろん、イザークにディアッカに……それにシンとルナマリアまで。
（みんな俺達のために、こうして。やはり嬉しいものだな）
あの大きな戦い……メサイア攻防戦、デュランダル議長のディスティニープランを阻止した後、地球とプラント――ナチュラルとコーディネーター、二つの人類の争いも一応の一段落を見せた。
いつまた大きな戦いが起こるかは分からない。それでも手には入れられた、ささやかな平和だ。……だからこそ。

俺はウェディングロードを歩きながらミーアに、少し顔を向けて視線を投げかけてみた。彼女も、同じようにして俺を見つめて、にこりと微笑みで応えてくれた。

――ウェディングロードを渡って、結婚式のクライマックス。
この俺、アスラン・ザラとミーア・キャンベルは神父の前で誓いの言葉を、永遠の愛を互いに誓い、それから結婚指輪をお互いの薬指にはめた。
俺が指輪をミーアの指にはめた時、彼女はまるで子どものように目をきらきらとさせていた。そう言う所も、とても可愛くて。

そして、お互いが結ばれるための……誓いの口づけも。
既に良い年した大人で、これまで激しい戦いや大変な事を経験したけれど、何だかひどくドキドキして、赤面して固まってしまった。一番大事な所でこんな事になるとは、我ながら情けない。だけどミーアは、少し可笑しそうにはにかんだ後で。
「……くすっ！　大好きです――アスラン」
そう言うと彼女は、しなやかな両腕を俺の両肩と首に絡めて、ぐっ

と身体を引き寄せて口づけ――愛情一杯のキスをした。
「!!」
ミーアの積極的な好意。彼女らしい、そんな愛情で。驚きはしたけれど、もちろん……俺だって。
「――ふっ」
俺もミーアを強く優しく、抱きしめて応えた。
愛していると言う、想い。それは俺だって負けてはいないのだから。

――――

こうして俺たちは晴れて結ばれて、夫婦になれた。
披露宴も無事に終えて、それからは交流も兼ねた軽いパーティー。来てくれたみんなに二人で挨拶をして回って、改めてミーアとの婚約を祝って貰えた。
楽しいパーティーだった。……それから俺は。

「これが平和、なんだな」
パーティーも一段落。俺は少しみんなから離れて、教会裏の草原で一息、休息をとっていた。
(それにしても俺が結婚、か。自分でも――大きい決断だったと、そう思う。けれど)
ミーア・キャンベル、元々はプラントの歌姫であるラクス・クライン、その影武者となった女の子だった。……その為に顔までラクスと同じに整形して、デュランダル議長の駒として利用された。
ただ、彼女は――ミーアは。

「なっ!?」
いきなり目の前が何かで覆われて、真っ暗で何も見えなくなる。驚いた俺にすぐ近くから……悪戯めいた声で。
「私が誰だか、分かりますか?」
この声、もちろん俺が間違えるはずがない。俺はもちろんと言って、正体を当ててみせる。

「俺の、一番大切な人の声だ。……ミーア」
「はい！　大正解ですっ、アスラン！」
　ぱっと、目を覆っていた両手が外された。いきなりの光で眩くて、そんな俺の後ろから現れて姿を見せた、桃色髪の花嫁。
「ははは、ミーアはまるで子どもみたいだな。こんな悪戯を俺にするなんて」
　可笑しく思いながらも、少しだけ苦笑いしながら俺はミーアに言った。彼女は不満そうに頬を膨らませて……。
「だってアスラン、一人でどこかに行ってしまいますから。
　私を置いて行ってしまうなんて……ひどいです」
「っと……すまない。つい少し、一人で考え事をしたいと思って、その……」
　でも置いて来てしまったのは悪い事だったと思う。言い訳に近いかもしれないけれど、そんな俺にミーアは右手の指先を口元に当てて、くすりと微笑んでくれた。
「――大丈夫です。だってアスランはよく考え詰める所があるって、メイリンさんから聞いていましたから」
　メイリン・ホーク。メサイア戦の後で最初に交際していたのが、彼女だ。けれど価値観や考えの違いとかで上手く行かなくて、別れて。そんな中でミーアが俺に告白して来た。
　俺の事が――好きだと。
「横取りみたいかもしれないけど、でも凄く嬉しかったんです。アスランの優しさだからかもしれないけれど……でも、私の気持ちを受け取ってくれて」
　あの時は、俺も色々とどうしたらいいか考えもした。けれど今は、結果的には良かったと思っている。
「こんなにミーアが幸せそうな姿が、見る事が出来た。もちろん俺だって、君といると嬉しい気持ちで、一杯だから」
「私が幸せなのも、アスランのおかげです。……こんなに胸の奥が温かいのも」
　ミーアは自分の、人並みよりもふくよかな胸に手をそっと置いて呟

いた。それから……。
「ねぇ、アスランは覚えてますか？」
「――どうかしたか？」
不意に尋ねて来た彼女。何の事なのか、俺は聞いてみると……穏やかに表情を緩めて話の続きをした。
「あの戦いの中で私が、一度死にかけた時の事。ラクスさまを庇って……代わりに銃で撃たれて。
沢山利用されて悪い事もしましたから。だから私が身代わりになるべきだって。それに……私はラクスさまの影武者、偽物ですから。そうなるのは当然だって、あの時思ったの」
「……」
複雑な話だった。けれど、それなら俺もミーアに伝えたい事がある。
「ミーア、君は――」
「……だけど、例え偽物かもしれなくても、今生きてこうしていられるのが、本当に嬉しいんです」
けれど俺が伝えるよりも先に、彼女は明るく言って応えてくれた。
「撃たれて死にそうだったけれど、奇跡的に助かって。それから戦争が終わった後も、また歌う事だって出来ましたから」
ミーアの言う通り、あれからオーブでも彼女は歌手、アイドル……歌姫として再び活動していた。
今度はラクスの影武者でなくミーア・キャンベルと言う、一人の人間として。
「それが私に出来る事で、歌う事も……大好きですから。
――もちろんこうしてお嫁さんに。歌と同じくらい大好きな、アスランと結ばれた事も嬉しいんです」
上機嫌で、幼い少女のようにニコニコしながらくるり、くるりと回って楽し気に舞う。まるで妖精のように。
そうして俺の前へと来た、ミーア。
新緑色の草原に立って、済んだ青空と海を背景に、彼女は俺に言っ

た。
「アスラン。せっかくだから私の歌を、聞いて欲しいの。
今、こうしていられる幸せを、新しく歌にしましたから。だから私の一番の人に、聞いて欲しくて」
ミーアの歌……か。
「もちろん。俺も聞いてみたい、ミーアが歌う……歌を」
俺の答えに彼女は幸せ一杯の、笑顔を見せた。それからそっと両目を閉じると……静かに歌い出す。

「～♪　～♪」

穏やかな自然の中で歌う、花嫁姿のミーア。
優しい風にたなびく白いドレスとベール、それに彼女の長い髪。陽の光に照らされる白とピンクはより鮮やかに、綺麗に見えて。俺も見惚れてしまっていた。
それにミーアの歌も。彼女はラクスと違い、どちらかと言うとアイドルのような、明るくきゃぴきゃぴした歌が得意だ。しかし今の歌は、この自然に調和するような穏やかで、静かな……でもとても、綺麗な歌で。
（本当に、ミーアは歌うのが好きなんだな。歌が好きだって言う想いと、俺への好意も……よく伝わって来る。
ミーア、やっぱり君は――）
ミーアは確かに議長の駒として、ラクスの代わり、影武者として利用されていた。けれどミーアはミーアだ。
俺やキラのようにモビルスーツに乗って戦う事は出来なくて、軍人ですらない。ラクスやカガリとも違って、政治や国を動かす力もない。ただ、彼女は歌う事が好きな、一人の普通の女の子なんだと。
優しくて、繊細で純粋な、恋心も抱く……女の子で。俺はそんな所に惹かれて、何より守りたいと思った。ミーアの、ミーアとの幸せを。
ミーアが歌うのを、俺は心から聞き惚れていた。――そして歌い終

えると彼女は、一言。
「これが私の新曲、アスランのために作った……歌です。気に入ってくれました？」
感想はもちろん、決まっているとも。
「ああ。ミーアの歌は俺の心に何より届いて響く、最高の歌だ」
俺が伝えた思い、感想。それを聞いたミーアは……。
「――えへへっ！」
また嬉しそうにして、屈託のない眩しい笑顔を見せてくれた。
年頃の女の子が見せるような、純粋な笑顔。そんなミーアの笑顔も守りたい、これからも……俺が守ってみせると。
俺は愛する彼女に微笑みを返して、そう強く誓った。